

災害時を意識した住まいと暮らし

東京学芸大学附属世田谷中学校

実施学年：2年
生徒数：160人（4学級）

実施教科：家庭科
実施時間数：6時間



避難所生活を知る



資料まとめ



付箋による話し合い



レポート作成（調べ学習）



プレゼンテーション作成

学習のねらい

- 日本は自然災害が多く、誰もが地震等により被災する可能性があり、常日頃から災害時を意識する機会を持つ。
- 現代の中学生は、協働体験が少なく、コミュニケーションをとる機会が減少してきているといわれているが、災害を他人事ではなく、自身にとって関わりのあるものとして考えることができる。
- 「災害時を意識した住まいと暮らしの教育」を考え、住まう人の立場になり、自分に置き換えて「どのように暮らしたいのか」を考えながら、住まいや住まいを取り巻くものを考えることができるようになる。

学習活動

- 各班で災害時の居住環境において「避けたい・不快」と自分が思う事項について、話し合い、まとめる。
- ①【個別ワーク：導入】各自およびジグソー学習による住居に関する基礎知識の収集
 - ②【グループワーク：班での議論】各班で災害時の居住環境に関するテーマを考える。
 - ③【個別ワーク：レポートの作成】各自で仮設住宅における課題、仮設住宅の作り手となる場合を想定して、課題解決のための具体策についてレポートを作成する。テーマについて各自でインターネットや学校図書館で調べた結果をレポートにまとめる。
 - ④【情報の共有】班内でプレゼンテーションを行う。
 - ⑤【グループワーク：コミュニティについての班での議論】
 - ⑥【グループワーク：プレゼン作品の作成】iPadを用いて学習ソフト(loilo ノートソフト)で班のプレゼンテーション作品にまとめる。
 - ⑦【発展】新しい仮設住宅であるドーム型住宅を学ぶことで、災害時における居住環境の問題解決について理解を深める。

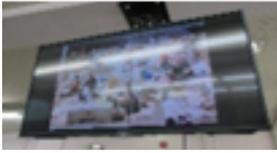
準備品

プリント、ドーム型プリント、画用紙（四つ切り・八つ切り）、新聞・本から作成の資料、本、i-pad、モニター、発砲スチロール箱、バランスボール（白）、丸シール、付箋（青・赤）、マジック、loilo ノートソフト

実施場所

家庭科室・学校図書館

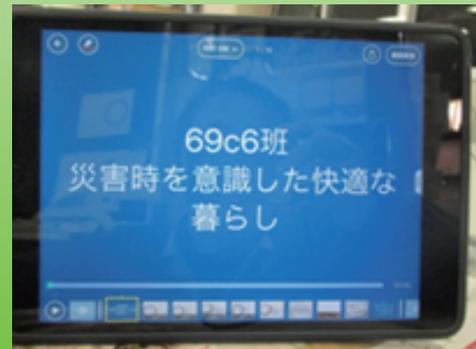
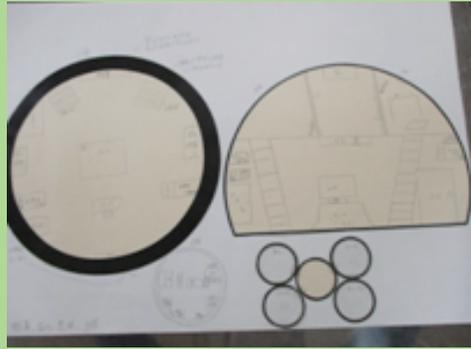
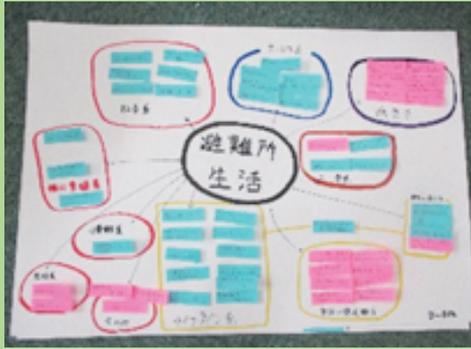
学習の流れ

場所・授業数	概要	活動の様子	反応
<p>学校図書館</p> <p>1時間目 (50分)</p>	<p>(1)</p> <p>①東日本大震災（ふくしまの30日）の本（福島民報社編）の体育館での生活の写真をモニターで観る。</p> <p>②3.11.時の本校での先輩の中学生たちの様子、体育館での寝泊り、食事の事などの事実を伝える。</p> <p>③付箋を班の画用紙に並べ・同事項は重ねながら思いや意見を出し合う。</p> <p>(2)</p> <p>①新聞・本からの4種類の資料を各班に渡す。</p> <p>②班内で、何が記入されていたのか自分のまとめをスピーチして、4つの資料の情報を全員が共有する。</p> <p>③班内で話し合い、新たに考えたこと、意見を共有する。</p> <p>④災害時の「住」について「避けたい・不快」と思う事項のまとめを各班ごとにする。</p>	 <p>当時、小学生であった自分のことを思い出す。 災害時の「住」について「避けたい・不快」と自分が思う事項をプリントに記入する。 →水色の付箋に各自で記入。(3分) →班の画用紙に並べる。(5分) 4つの資料から自分の担当を1つ決め、読んで、大切なことをプリントに書きとめる。(10分)</p>  <p>自分のまとめをスピーチする。 (1人1分×4人) 新たに気づいたこと、知ったことをピンクの付箋に記入して、班で相談しながら4つ切りの画用紙にまとめる。</p>  <p>内容ごとにくる。班ごとにマジックで記入。(5分) グループ分けした内容の中から、レポートの各人の担当テーマを1つ選ぶ。</p>	<p>驚きの声。 「赤ちゃんもいるよ。」 「壁がない。」 「皆、同じもの食べてる。」 「お年寄りがたくさんいるよ。」</p>
<p>学校図書館</p> <p>2時間目 (50分)</p>	<p>(3)レポートにまとめる:</p> <p>①資料、学校図書館の本、インターネットを使った調べ学習。</p> <p>②「仮設住宅に関連して、どのような問題・課題があり、その対策には何が考えられるのか。」「仮設住宅を作る側に立った場合にどのような配慮・具体策があるのか。」</p> <p>③各自がまとめをスピーチし、より深い各班の情報を班で共有する。</p> <p>ドーム型住宅の資料(インターネットから)イメージを伝え、次回授業で、ドーム型の仮設住宅について、考えて、構想してもらおうことを伝える。</p>	 <p>各自担当事項のレポートを作成する。 (30分、A4版1枚) 知識のエキスパートとして各自がまとめをスピーチする。(1人1分×4人) レポート追記・仕上げ(5分)</p> 	

学習の流れ

場所・授業数	概要	活動の様子	反応
家庭科室 3 時間目 (50 分)	(4) ①ドーム型住宅について説明する。 ②ドーム型住宅で、自分の家を構想する。 ③共用ドームを 1 つ班で構想する。共用ドームと班員 (4 件) の配置を考える。	ドーム型住宅の利点などを知る。 ドーム型住宅で、自分の家を構想する。(平面図、上からと側面からの 2ヶ所について各自のプリントに記入する。) 4 件について、共用ドームを設定しながら、コミュニティを考える。 班でドーム型の図に共用ドームを記入して、四つ切り画用紙に貼る。 4 件の配置図も貼る。 	「1人で住みたい。」 「中に階段作っても、いいですか？」 「階段は横から見るとどう描くの？」 「明るく窓は大きく上にとりたい。」 「共用部分と自分の家は離したい。」 「便利だから、4 件は共用部分とくっつけたい。」
家庭科室 4 時間目 (50 分)	班活動 ④共用ドームを設定しながら、16 件のコミュニティを考える。 ⑤共用ドームを設定しながら、160 件のコミュニティを考える。	16 件は家のドームと共用部分のドームを色を変えて丸シールで貼る。 160 件は、16 件と同じ面に 16 件を基本のユニットとして、周りに記入する。	「16 件だったらコンビニか何か欲しい。」
家庭科室 5 時間目 (50 分)	⑥共用ドームを設定しながら、1600 件のコミュニティを考える。 プレゼンテーション作成準備 入力原稿書き。	1600 件は、八つ切りの新たな画用紙に全体像、共用部分の特徴と共に記入する。 16 件→160件→1600 件のコミュニティ配置について、そのポイントと理由を各自プリントに記入する。	「1600 件は大学が欲しい。1600 では無理でしょ。」 「でも、中学校とか小学校は欲しい。」 「図書館みたいなところが欲しい。」
家庭科室 6 時間目 (50 分)	(5) プレゼンテーション作成 loilo ノートソフトで入力する。 プレゼンテーションを観る。	写真、音声を入力。個人の構想、班の共用ドーム、4 件、16 件、160 件、1600 件の配置写真とそれぞれのポイントを入力する。 (全体で気をつけること、快適にした点などを伝える。) いくつかの班のプレゼンテーションを観る。	

生徒の作品



先生の声

実施に当たり工夫した点 苦労した点

工夫点：

- ・情報の共有のために、班内での1分の発表時間を作り、ミニプレゼンテーションをした。
- ・個人の感想から、班への共有につなげるために、付箋の色を変えた。
- ・班の共有を全体の共通認識にするために、資料を4つのグループで準備した。
- ・視覚でわかりやすくなるように、最初の共用ドームのプリントの色をクリーム色にした。
- ・丸シールの活用で、時間短縮と色分けをした。
- ・入力用のソフトを利用し、生徒が単純な作業での入力を可能にした。
- ・学校図書館を活用した。

苦労した点：

- ・Wi-Fi環境に影響を受ける時間帯があった。

児童・生徒の反応

- ・生徒間での議論において、人間関係における居心地の良い距離、治安などの街全体のこと、将来への意識などについて意見が出された。災害時の「住」について「避けたい・不快」と自分が思う事項への記載において、プライバシーがないことをあげ、最も高い事項となった。次いで、風呂、トイレ、寒さについての順に記載が多かった。
- ・プレゼンテーション作成までの過程で自ら調べ、考える場面を設定することで、災害を自分自身に関わることとしてとらえる様子がうかがえた。その結果、人間関係における居心地のよい距離について考えていた。災害を身近なものとしてとらえる様子がみられた。
- ・人が快適に暮らすための生活環境について、被災者の立場に自分を置き換えて考える姿が生徒の意見からうかがえ、災害時の住宅にとどまらず、自らが「住」に対して何を重視しているのかについて考える様子が見受けられた。

教師の変化 (担当、担当外を含めて)

- ・「快適」に関する生徒のこだわりを知ることができた。世代が違っていると、こだわりも少しずつ変わってくることを感じた。今を知る意味でも、今回授業ができてよかった。
- ・生徒の正直な思い、壁がないのはつらい、音楽が聴けない生活は考えられない、部屋は明るくあって欲しい、などの思いは生きるためにとても大切なことだと改めて感じた。それらを中学生として何とか改善できないか、と考える姿はとても頼もしくもあった。大人はもっと身近なこととして、忘れることなく、継続して考えないと、と改めて中学生に教えられました。まずは、この授業を来年度も続けることだと思いました。

その他

今回の授業をさらに発展させて、実際に体験された方のお話をお聞きする機会や、その方たちに生徒が考えたプレゼンテーションをみていただき、それらを生徒に返せる授業にしたい。

「生活者の視点」から本当に大切な暮らしの条件について、意見を出し合い、深めたい。(グループワーク:クラスでの議論)
今後、クラスを超えた情報の共有をしたい。(ICT 制作物を活用した情報共有)

今年度、助成で震災や住居関連の多くの本を購入でき、本校学校図書館に寄贈でき、来年度以降の授業にもつなぐことができ良かった。